

◆三橋百笑 選 ～朝日新聞の俳壇・歌壇より～

コーヒーがこの世にあって助かった「コーヒー飲む？」でいつも仲直り

上田結香

「お茶飲む？」より、やはりコーヒーか。「ミルクティー飲む？」ですよね。

私と主人ならもち「熱燗いく♪」かな。

にんちしょう寄り添う筈の吾が妻に寄り添われてる穏やかな日々

杉山明和

NHKの川柳で「食べました食べたはず食べたかなあ」。何度読んでもおかし

い！認知症もどきが少しずつくる。わが家にも。それまで二人で逃げまろう！

ベランダに洗濯物を干す朝狸が路地に行くではないか

堀百合子

竜馬が行くならともかく、狸とは！「キャハッ」。

ぐちゃぐちゃの西瓜が拍手されてゐる

竹内宗一郎

すいか割で見事に命中し、わーわー沸いている浜辺。遠い昔の青春時代よ。

大国のうしろにつけば安全かおまえ前へ行けといわれたらどうする

直木孝次郎

ほんとにどーするの！？怖い歌ですが、こわさ通り越して滑稽にさえ思えてきます。

なんとなく手配写真我に似るサングラスして交番前通る

坪内政夫

「クスッ」。

書をひろげ半ば寝てゐる秋灯下

家泉勝彦

テレビつけほとんど寝てる秋灯下。一年中こんな母を見てきましたわ。

ペンギンはいつも正装風光る

小出功

なんてさわやか♪私も白いブラウスに黒いパンツ姿が一番大好きで一す。

◆伊藤洋二 選 ～俳句歳時記より～

出所：合本俳句歳時記第三版 角川書店 平成九年五月三十日初版

【夏】

烈日に開きて固き扇かな

中村汀女

昭和期のある酷暑の日、肥後の国は熊本の江津湖を吟行しておられました。水面を渡る有明海からの風が一服の清涼剤です。あいにく夕風でびたりと風が止み扇子を取り出しましたが、ジメ暑（じめあつ）指数一位の熊本では扇子も汗をかいていました。選者が数年暮らした水前寺界限の懐かしき夏の日です。

温泉（ゆ）の村に弘法様の花火かな

夏目漱石

温泉の村とは道後温泉かと思いきや、修善寺温泉だと知った選者は故郷自慢の軽薄さを恥じる次第です。修善寺の弘法大師奉納花火大会とのことです。思い込みは加齢の兆候とか。遅ればせながら「札所行脚」と「滑稽俳句」により自己解体と自己再生を図る為に唱え奉る「南無大師遍照金剛」。

雨ふるふるさとははだしであるく

種田山頭火

はだしで道を歩いた思い出は、川遊びの帰りに幼馴染とトボトボ歩く砂利の夏の道。坂道を越したあたりで俄雨、泥んこ遊びが大好きで叱られついでに泥の足。自由律俳句の第一人者は、周防灘を見つつ生き生き歩く砂利の夏の道。何時しか時雨し山の暮れ、何時また歩く故郷の道、素足は自由人の足袋。

富士行者白衣に雲の匂ひあり

正岡子規

日本七霊山は、「富士山」、「立山」、「白山」、「大峰山」、「釈迦ヶ岳」、「大山」。そして、西日本最高峰一九八二m、伊予西条の「石鎚山」。先の故郷自慢の反省は何処へやら。七月一日のお山開きには必ず雨が降り、神々は雲に乗り頂上社に鎮座されるのです。富士は日本一の山、石鎚は我が故郷一の山。

青蛙おのれもペンキぬりたてか

芥川龍之介

雨蛙の水着は虹を織り込んで艶々としています。理科の授業で虹の色を赤→橙→黄→緑→青→藍→紫を「あだきみあおあいむらさき」と憶えた。何時しか憶えることよりも忘れることの多き「嬉しさ」よ。瞬時で勝負する俳句の「面

白さ」よ。十七音字の玉手箱を素早く空っぽにする「難しさ」よ。

時ふれば手桶水澄み濁り鮎 **中村汀女**

現在の農地は耕地整理され、コンクリートの用水路がまっすぐに伸びています。それまでは石垣造りの小川が網の目のように流れていました。梅雨入りの頃、鮎が産卵のため小川を遡って来るのです。「濁り水」の「濁り鮎」は暫くの間 手桶に飼われ、水澄む頃に鮎の身も清められるのです。

縁ばかりまはる金魚は尾切れかな **河東碧梧桐**

生存競争の主流から外れた彼は「何故か」と思案しつつ流れに逆らって外廻り。歩き疲れた足には磨り減った革靴。土曜夜市の金魚すくいは人ばかりです。端の子のお椀には一匹もいません、彼は反転した勢いでお椀に飛び込みました。その後病弱だった飼主の子は彼の尻尾が生えるに連れて元気になりました。

卓の百合あまり香つよし疲れたり **杉田久女**

「真面目すぎる」「正直すぎる」「賢すぎる」とは他人様の云ふせりふで、本人にとっては当たり前のことなのだが、どうも「すぎない人」には不愉快らしい。過ぎたるは及ばざるが如し。そのようなことは断じてあり得ない。ただ残念ながら「すぎる人」は自己中で他人に与える術を知らない人と反省する選者であった。